

言葉は通じなくても授業はできた

小木曾 尚子

(17-1, シリア, 音楽, 中津川市立福岡中学校)

岐阜県中津川市立福岡中学校から来ました小木曾尚子といます。私はシリアのほうへ音楽の隊員としていって来ました。言葉は通じなくても授業はできたということでお話をしていきたいんですけど、言葉は通じないというか私はほとんど喋らずに子どもたちと授業をしたという感じですけど、まずその様子を見ていただきたいと思います。

(ビデオ)

という感じで、最初にちょっとしたイントロクイズみたいなことをして子どもたちの興味を惹きながら授業をしていたんですけど、最初私は本当に不安で言葉がうまく喋れるかどうか人一倍その辺が心配だったんですけど、こんな私でも何とかなれたかなという感じです。でも今の授業風景なんですけれど、これは私の配属先がウエルワというところで国連の機関がやっているところだったんですけど、そこのお客様が見えたときで、だからギリシア人の方とかカナダ人の方とかが来ていました。なので今特別な格好をして子どもたちは最初にパレスチナ体操というのをお客様に披露してからこの授業だったので、こういう格好をしていますけれど、こんなふうに授業をしていたんですが、これは私としては駄目な授業といたしますか、何が駄目かという次なんですけれど結局私が授業しては駄目なんです。技術移転がねらいなので、音楽の授業を根付かせること、私たち日本人が帰った後も音楽の授業が続いていけるようにするためには、現地の先生がやらなくてはいけない、日本人を必要とする日が来るようにそれを目指してやってきました。この写真を見てもらえるとわかるように現地の先生がやってくださってるんですけど、すみません左の写真なんですけれど、やっぱりまだ弾けないというのはあるので、私がちょっと弾きながら子どもたちが歌う、先生は音階の指導をしているとかいう感じの写真です。右側のほうは子どもがキーボードを弾いていますけれど、音楽クラブと一緒に頑張ってきた子をつかってというか授業で弾いてってお願いして子どもたちが歌っている、一番後ろに現地の先生が座っているんですけど何とかこういう先生方の前に出て授業してくれるといいなということでやってきました。技術移転がねらいということで、音楽の授業もやってほしいんですけどまずその前にやらなければいけないこと皆さんもわかっていると思うんですけど人間関係を作るというところです。そのために私が心がけたこととして、まず笑顔で挨拶ということ。シリアの方々、ほかの国もそうだと思うんですけど、自分の国を本当に愛していますのでとにかく他の人にも自分の国を好きになってほしい、そういう気持ちをすごくもっていらっしゃるので、私が悲しい顔をして

いるとすごく心配してくれたり、とにかく笑顔でいるというのはすごく大事なかと、私もこの国で楽しい生活を送っていますよということで、笑顔で心がけるということです。その次に名前を早く覚えるというのがあるんですけど、生徒の名前より職員の名前、私は4つの学校に行っていたんですけど、だいたい60人くらいの先生がいるんですけど、私は最初生徒の名前をすぐ覚えようと思ったんですけど、一緒にいた先輩隊員がまず職員の名前を覚えなきゃだめだよと言われて、えっと思ってその時にすぐ名前と特徴ですね、この人は顔が大きいとか、いつもサンダルを履いているとか、化粧が濃いか、そういう名前と特徴、メモを取りました。そうするとわりとすぐ覚えられるようになってきて、ムハンマド先生とか言うとやっぱり喜んでもらえたかなというのはありました。名前ですごく親近感が持てたのかなということを感じます。あともう1つとして、たくさん褒め、認めるということで、言われると嬉しいことをたくさん覚えておくということももちろんなんですけれど、校長先生の前でその先生のことをすごく褒める、よく頑張っているよ、今度はそういうJOCVなんかは教育庁とかいうところに訪問することも何回かあるんですけど、そういうところで自分の学校のことを褒める、すごくいい学校ですよ、そんなふうにとんどん学校のいいところや先生のいいところを伝えるようにしました。そうしていくと、なんとなくまわりの人たちも日本人をわかろうとしてくれるとか、尚子、私をわかろうとしてくれるのかなということを感じました。もちろん私は3代目なので、今までの隊員がそういうのを築いてきてくれたんだなという信頼関係に感謝する気持ちも忘れずにやってきました。

シリアという国はイスラム教です。ものすごいやはりこれは私たちが想像する以上のものがありまして、エピソードなんですけれど、子どもがコンサートするからぜひ行こうよという話をしたら、行かないっていうんですね。なんでって言うと、行きたくないから、音楽を聴きに行く楽しいよっていうと、いや僕たちにはコーランがあるから、コーランで育ってきているから音楽なんていらぬ。まあなるほどなと思ったんですけど、こういうことがあったりとか、イスラム教はお客をもてなすことをすごく大事にしているんで、先生方が朝学校に行くと疲れているんですね、どうしたのって言うと、昨日お客がいっぱいいたから大変だったのよって、それが一応理由になってしまふ、今日は私もう疲れているから尚子授業やってみたいな感じで。最初はえっと思うんですけど、まあそういう国もいいかなということを感じるようになってきました。インシャアッラーというのは、今この下の写真は、職員室はないので先生方が空き時間のときにこういう休憩室みたいなところがあるんですけど、ここでおしゃべりをしながらたまにいろんな約束をするんですけど、そういうところで最後に先生方がインシャアッラーと言うのは、神がすべてを決めるから、行くか行かないかは神が決めるからみたいな感じで、こういう約束の仕方をするんですけど、結局行ってみても来なかった、次の日どうしてこなかったのと言ってみたら、神が決めたからみたいな感じで、約束を破られることはしょっちゅうなんですけれど、最初は

頭にくることが多かったんですが、2年目になってくると私もそういう言葉を使い始めて、結構楽に約束ができるというか、向こうはもうそういう気持ちだからこっちもこういう気持ちでみたいな感じで、わりとでも最後の方はこれは便利だなということを感じて、違いを発見することが楽しくなってきたという感じです。違いということで、日本と比べて考えないということでもいろいろあります。教員の体罰が激しかったりとか、勝手に成績をつけていく、これもどここの家の子どもだからこの子は中だとか、この子は全然よくできるんですけどもういいみたいな感じで、家柄とかで決めている、私も納得がいかなかったんですけど。あと教師の一方的な授業、それから音楽の授業を重要視されていない、子どもよりも自分たちの都合を優先させる、いろんなことがあるんですけど、それがおかしいと考えていると、自分の頭がどんどんおかしくなってくる感じなので、こういうことがあっても自分はちゃんとしよう、日本に帰ってからこんなこと絶対許されないだろうなということは思いながらやっていました。1つ、1年目に、どうしても子どもが一生懸命練習した曲なのにその曲を発表させない、この曲はさせないということがあって、もうそれは私も我慢できなくて校長室に行って、私はこれ納得できないと言って校長室の机をポンと叩いたら、その校長先生に尚子なに失礼よ、机を叩くなんてと言われて逆ギレをされて、なんで尚子そんな怒ってるのと言うから、気持ちが伝わってないからと言うと、あなたのアラビア語がわからないからよみたいな感じで言われてしまうことがあって、悩んだこともいっぱいあったんですけど、そういうのがだんだん慣れてくる、やっぱりそのへんはあまり自分で追求しない方がいいんだな、一線をおいておこうというふうに考えていくと、なんとなく物事がうまく進んでいくようになっていきました。

私の主な生活ということで、どんなふうな1週間を送っていたかということをお話したいと思います。日曜日から水曜日までは任地で授業を行っていました。そして木曜日、この日は授業はなしにしてもらって学校のほうにお願いして、首都にあがります。他の音楽隊員、私以外にも4人いましたので音楽隊員と会議を行って、次は何をやろうとか、教科書をつくらうとか、コンクールをやろうとか、そういう会議をしました。あと教員講習会などを行ったりしました。金曜日はイスラム教はお休みなので、向こうの国はお休みの日なので私も学校をお休みして、先生の家遊びに行ったりとかそんなことをしていました。土曜日は任地で音楽クラブを行うというふうでした。夏休みや冬休み、私の学校も6月くらいから9月くらいまで3ヶ月間お休みがあったので、こういう時を利用して隊員でみんなで教員講習会を開きました。一つの主な活動として、音楽の授業がなかった国で音楽の先生を育てるということで、ほとんどの先生が音楽の授業を経験していませんので、音楽の授業の重要性をわかってもらえないところもあります。その中でまず首都に30名ほど音楽の先生がいらっしやいまして、その先生のための講習会をはじめて行いました。そこで新たにリコーダーの吹き方とか作曲の仕方など、そういうのを講習会を開いたところ、音楽の先生が非常に興味を持ってもらって、私たちと信頼関係とまではいかないかもしれませんが、そ

ういうのができてきたので、今度私たちが音楽の先生をもっと増やしたいんだけど、地方にももっと音楽の先生をつくりたいんだけどと言うと、じゃあ私たちが教えに行きあげると言うことで、首都からバスで4時間とか3時間とかかけて駆けつけてくれるようになってきました。2番として、地方の、今度最初に13人の小学校の先生ということで選抜、校長先生と相談をしてこの先生にこの学校の音楽の授業を担当してもらおうということで、選抜したんですけど、各地方から13人、その先生方の講習を行ったのですが、首都の音楽教諭がトレーナーとして、この金髪の方なんですけれど、やはり言葉がしゃべれます、私たちはしゃべれないので、現地の先生が言うことによってもものわかり方がはやくなりますし、かっこいいというのもありますね。そういう憧れなんかを持ってもらえて、私たちがバックでフォローするという形で行われていきました。3番として、今度その13人の先生方がそこで学んだことを自分の学校に持ち帰って、私たちと一緒に授業を行いながらスキルアップをしていくということをやってきました。4番目として、小学校、今度は全員教員を対象にした学校集会を開こうという話をして、今度その前に13人の先生が講習を受けてきたことを活かして各学校で広めてくれたというのです。結果、学校の音楽の授業への意識が変わってきて、授業をやってくれる先生が増えてきました。現地の教員の協力がなにより大切というのは、私がいくら頑張ってもアラビア語はやっぱりだめなので、子どもたちの喰らい付きも違ってきます。この様子は、コンクールを行ったんですけどその練習なんですけど、ちょっと映像が悪いんですけど見てください。

(ビデオ)

見てもらうとわかるんですけど、子どもは私服を着ています。なので休日の練習です。こういう練習に現地の先生と一緒に参加してくれるということは本当にありがたいことだと思います。あと・・・という太鼓があるんですけど、この叩き方はもう私は全然わかりませんが、近所で音楽をやっていた人がいてその人が協力してあげるよと言ってきてくれてやってくれました。

いま、振り返って実感することとして、現地の先生や現地の方々に頼りにすると結果いいことがいっぱいあったなということを思います。ほんと最初は我慢ですけど、自分でやった方がはやかったり、自分がやった方がもっと子どもが成長するんじゃないかとか勝手に思ってしまったりすることもあったんですけど、結果として先生どんな授業にしたいか願いを伝えることによって、自分がアラビア語がなんとなく上達してきたかなというのが少しですけどありますし、自分の言葉がわかってもらえやすくなってきたというのがありますし、現地の先生が授業のイメージが私と打ち合わせをすることによってわいてきますので積極的にやってくれる、現地の先生と生徒の楽しい音楽の授業を見ることができた、後ろで私はほほえましくそれを見てることができたというのは、すごくよかったなと思います。

私の報告はこれくらいとして、シリアというとみなさん危ないイメージがたぶんあるんじゃないかなと思うんですけど、暮らしてみるとわかるんですけど全然本当に安全

な国で、人々は優しいですし料理もおいしいですし、とても住みやすい国でした。それから自分が好きな音楽を通して外国にも仲間ができたということは本当に大きかったなということを思います。協力隊に参加して本当によかったなということを感じています。すみません、拙い発表でしたがご清聴ありがとうございました。